

日本における翻訳造語——「カセット効果」について

柳父 章

人類の文明は、文字とともに始まる。日本の文明の始まりは、古代に中国、あるいは朝鮮から中国語の文字を受け入れたときから始まっていた。日本ではこれを漢字と言っている。

日本における漢字受容の問題は、二つの方面から考える必要がある。すなわち、一つは漢文訓読という文章法で、もう一つは単語としての漢字受容であるが、とくに日本語としての漢字造語の問題が重要である。日本における漢字受容の歴史は長いが、この論文では歴史的背景を振り返りつつ、とくに近代以後の、西洋語翻訳における漢字造語の問題に焦点を当てて考えていきたい。

日本製の漢字造語は、中国における用法と比較すると、要約すれば、その意味よりも形式面が重視されているという特徴がある。漢字の要素として、古来「形・音・義」の三つがあるとされるが、この「形」が、「音」や「義」よりも重視されている。この特徴が、近代以後の西洋語翻訳における漢字造語でも重要な働きをしているのである。

1. 漢字造語の伝統

およそ人間の歴史は文字から始まる。日本という国や日本人という人間の起源は、この島国の人々が中国や朝鮮から中国語の文字、漢字を受け入れて、初めて文字を知った時に始まると考えられる。

古代大和の人々は、初めて知った漢字を、便利な道具と考えたのだろうか。どうもそうではない。漢字は、用途不明の、全く珍しいものの出現であったように思われる。たとえば、およそ2000年以前の弥生時代の頃の大和に、中国、朝鮮から鏡などの青銅製品が到来するようになったが、やがて大和の人々も、それを真似て鏡などを作った。そこには舶来の鏡を真似て、文字らしい形が刻まれているものもある。ところが、その文字の形が左右ひっくり返ったものなどがある。当時の大和の人々にとって、文字の意味は分からなかったが、とにかく何か大事なものとして扱われていたことが分かる。たとえばまた、稲荷山の古墳から、漢字が書かれた鉄製の剣が発見された。5世紀頃の作品と考えられている。一本の剣に、115の文字が入念に鉄を削って書かれていた。書いたのはおそらく当時の先進文明の朝鮮からの渡来人だったろう。それはきちんとした文章になっていた。しかし、これを所有したのは大和の人物だった。この所有者にとって、剣とは何だったのか、そこに書かれた漢字とは何だったのか。文字がびっしり書かれて、墓に埋められていた剣は、戦いの道具ではない。役には立たないが、何か貴重なものだったに違いない。物と同じように、文字もまたその用途はよく分からなくても、何かとても貴重なように扱われていた。入念に削って書かれて埋められた文字も、一般の人々の目につかない地中に埋められてい

たのである。当然表現や伝達の道具ではない。しかし、とにかくとても大事にされていた、ということが分かる。

同じような文字の扱い方の例は、古代大和に限らず、世界の至る所に見いだされる。とくに人類が文字を知るようになった初期、それは意味のある有用な道具としてよりも、意味不明の、しかし貴重な存在として扱われたようである。「意味不明の、しかし」というよりも、意味不明であるからこそ、ある貴重な存在となっていた、と私は考えたい。

漢字は、表音文字のアルファベットなどと比べると、文字出現初期のこういう性格を、その後も長く持ち続けていた。とくに漢字を舶来文化財として受け入れた日本においてその性格が強かった。以下、私が説く「カセット効果」の本質的特徴は、ここから出発している。

2. 日本的漢字、二字造語

日本に伝えられた漢字は、先進文明の意味を伝えただけでなく、やがて日本独自の表現、伝達的手段として使われるようになった。

和銅6(713)年、朝廷から、群・郷の地名は漢字二字の好字で表記せよという命令が出された。そこで、たとえば「曾」という地名は「曾於」と記されるようになって、音でも「そお」と読まれるようになった。また「木」の国は「紀伊」の国と表記されるようになり、後には「きい」の国という音で読まれるようになっている。これを「形・音・義」の「義」の面から考えても、「木」の国には意味があるが、「紀伊」の国では意味はない。すなわち、「音」や「義」よりも、漢字二字という「形」が重視されたのである。8世紀といえば、この国に漢字が伝わってまもなくの頃であるが、中国や朝鮮などと違った日本的漢字表記法は、この頃から始まったのである。地名ばかりでなく、人名も二字の表記が多くなった。たとえば、中国や朝鮮では「李」とか「金」のような一字の名字がふつうであるが、日本では今日でも「田中」や「鈴木」のように二字の名字が多い。

漢字二字で一語を表記するのは、地名や人名に限らず、その後日本で使用され造語される漢字語の通例となった。漢字の本国の中国では一字で一語が原則である。日本の漢字語が二字一語になったのは、第一に中国語の意味と区別する必要があったためである。そして第二に、漢字語が大和言葉の中で伝来の言葉と区別されるという機能のためであった。たとえば「翻訳は文化の創造である」という文で、「は」「の」「で」「ある」など原則として平仮名で表記される伝来の大和言葉が、一拍か二拍の音であるのに対して、「翻訳」「文化」「創造」は三拍か四拍がひとつかたまりの意味の単位となっている。漢字語は日本文の中で、名詞や動詞、形容詞の語幹として、意味の中心の働きをしているので、区別されて読まれる機能は大事であった。

こうしてできた日本語における二字一語の漢字語では、漢字の元の意味を無視してでも、二字という形式を守ろうとする傾向も生まれた。

近代になって西洋語、西洋文化を受け入れて新しく翻訳語を作る必要が生じたとき、やはり日本製漢字語のこの性格が受け継がれた。そこで注目すべきは、漢字翻訳語では、個々の漢字の意味よりも、二字一語の形式が重要な場合が多いということである。翻訳語を作った知識人にとっても、それを読む多数読者にとっても、翻訳語を組み立てている個々の漢字にはあまり意味がないことが多い。つまり、その意味は二字一語の形の中にある。

そのように前提されている。

たとえば「哲学」という翻訳語がある。これは philosophy の翻訳語で、近代の初め、西周は「希哲学」と訳した。ここで「希」は phil に当てた訳語だった。これは philosophy の創始者ソクラテスが、自分の学問はソフィストと違って、知識を愛するという phil が付いているのだ、と語ったことを受けていたのである（西周『西周全集 第一巻』、1960、宗高書房、16～7頁）。

ところが、やがて日本では、「希哲学」は「哲学」となる。西周自身もその後「哲学」という訳語を使っていた。二字一語という造語の安定感が好まれたのである。つまり、原語 philosophy の大事な phil の訳語、すなわち「希」を無視して、二字という漢字造語の形式が、人々に守られたのである。

「経済」という翻訳語は economy の翻訳語として今日使われている。これはもとは「経世済民」という economy の意味にいくらか近い意味の熟語から、二字を抜き出した造語である。形は二字で翻訳造語らしいが、「経」と「済」というその二字の漢字からは、economy の意味はほとんど伝わってこないのである。

たとえば、「経済」という文字を見る多数日本人は、その意味をどのようにして理解するのか。この文字の意味からではない。この文字の意味として、かつて学校で教わった定義とか、この文字が使われている文脈上の意味などから推察するのだ。この文字は、それを知るきっかけにすぎない。この理解の仕方は、英語を母語とする人々が economy の意味を理解する過程と同じであるように思われる。

他方で、漢字はアルファベットなどの表音文字に対して、表意文字であるとも言われる。言語学者の中には、表意文字や表音文字という概念は曖昧であると批判している説もあるが、以上私が引用した「哲学」や「経済」でも、表意文字という概念は不確かであると分かる。

3. カセット効果

しかし、本論では、ここで改めて日本製の漢字が独特の意味で「表意文字」であることを述べたいと思う。今日、日本や中国などで使われている漢字の多くは、確かに意味を表している。とくに具体的な事物を表記する例がそうである。しかしここで考えるのは、日本製の漢字造語であり、中でも翻訳語として使われる場合である。異文化の意味を担った言葉、とりわけ抽象的、観念的な学術用語などの翻訳では、漢字の表意の働きはまことに乏しい。それにもかかわらず、近代以後、とくに日本で翻訳語として漢字が多く使われてきた。それは第一に、日本人が有史以来漢字に対して抱いてきた信頼の結果である。漢字を教わって以来、日本語では、高級難解な言葉は大和言葉ではなく、漢字で表現してきた。漢字は市販されている大きな辞書では約5万語あり、これだけあれば古今東西あらゆる意味は表現可能とも思い込んできた。この思い込みが重要である。「哲学」や「経済」という文字を見た読者、とくに学生など初めてこういう用語に接する人は、漢字で表記されているのだから、きっとこれには大事な意味が込められているに違いないと思う。よく分からないが、重要な意味がこの文字の彼方にはあるはず、と思う。いや、よく分からないからこそ、大事な意味があるはずと思う。

こういう思い込みの効果を、私は「カセット効果」と名付けている。カセット cassette

とはもと宝石箱のことで、小さくて綺麗で、中にはすばらしい物が入っていそうである。しかしこれは箱であって、その中身は見えない。見えないから、かえってすばらしい中身が想像されるという効果である。

漢字については、まずその意味が重要なのだ、というのが常識である。一般民衆ばかりでなく、識者でも漢字について論じたり、書物を書いたりするとき、ほとんどもっぱらその意味を取り上げる。とくに語源に遡って漢字の意味を考える議論が多い。確かに漢字にとってその意味は重要である。とくに具体的な事物、たとえば「木」や「人」などを表現する場合がそうであろう。しかし、本論で問題にするのは、以上例を挙げたように、日本製の二字造語である。意味内容がほとんど無視されるほど、二字造語の形が重要な例が多かったのである。カセット効果とは、物の内容よりも、見かけの形が人を惹き付けるという効果である。

日本人の漢字受容の長い歴史の中で、「カセット効果」はさまざまな現象に観察される。漢字を読むだけでなく、耳で聞く場合、仏教の僧侶の経文音読では、聞いている信者の大多数は、何の意味かは分からない。分からないけれど、有り難いと思って、頭を下げてじっと聞いている。今日でも、日本の大多数の寺で、こういう現象が続いている。

さまざまな文化現象についても同じような効果が観察される。今日テレビのコマーシャルなどでは、多数視聴者にはよく分からないはずの言葉が繰り返し叫ばれている例がある。「タウリン 1000 ミリグラム配合！」と叫ぶ。「タウリン」とは何か、たいていの視聴者は分からないはずだが、そういうコマーシャルが作られるということは、大多数日本人がこの言葉の「カセット効果」に引っかかるという事実を明かしている。

外国から渡来した珍しい物にすぐ熱中するのも、同じような現象と考えられるのではないか。品物の価値はよく分からないが、とにかく立派らしい、高価である。高価であることがかえって惹き付けられる理由になる。たとえば西洋製の高価なブランド物が最もよく売れるのは日本であると言われる。

4. 普遍的な現象としてのカセット効果

以上、日本における漢字の働きを中心にその「カセット効果」を考えたが、同じような現象は、異言語、異文化に出会うとき、世界の至る所に見いだされるのではないか。日本語における漢字の位置と似たような関係は、西洋諸語におけるラテン、ギリシャの古典語の関係であろう。たとえば学術用語にはラテン、ギリシャ語系の用語が多い。一般の人々には分かりにくいのだが、識者は好んで難しい表現を使う。たとえば、Translation studies を translatology と名付けるかどうかを問題にした研究者がいて、学問の内容が立派になったらそう名付けてよいと考えていたらしい。logy と付く言葉の「カセット効果」であろう。(Munday, Jeremy; *Introducing Translation Studies*, 2005, Routledge, p. 10)

アメリカで大学に入って学問用語などを習ってまもなくの若者が、その難しい言葉などを盛んに使うような現象を「サフモリック sophomoric (知ったかぶりという意味で使われる。サフモア sophomore は大学2年生のこと)」と言う。これも不必要に難しい表現が好まれるという「カセット効果」の傾向の現れであろう。

1996年に起こったソーカル Alan Sokal 教授の悪戯事件も同じような例である。教授はフランスの最新流行の哲学の用語を盛んにちりばめ、物理学の難解な計算式を交えた論文

を、有名な学会誌に発表して評判になった。しばらく後、ソーカル教授は、あれはデタラメだったと告白したのである。論文の内容は当然だれにも分からなかったわけで、それがまともな学会誌に掲載され、知識人読者に評判になったというのは、まさに「カセット効果」であろう。

しかし見方を変えると、「カセット効果」は、ある場合には自然であり、また言語、文化の活動にとって有益な結果をもたらしている、とも考えられるのではないか。日本は有史以来、先進外国文化をとりわけ熱心に取り入れ、自らの言語、文化を豊かに築いてきた。それには、未知、不可解な異言語、異文化を進んで取り入れる「カセット効果」の働きのおかげがあったのではないか。

およそ互いに異なる言語や文化が出会うときの問題を、出会いの場から考えると、出会う相手の言語や文化は、必ず未知・不可解なところがあるに違いない。異言語、異文化の出会いは、未知、不可解から始まるのである。これに対して、一般に科学的方法は、既に知られた確かな事柄から出発し、その理論を積み上げていく。しかし、翻訳は知らない言葉との出会いから始まるのである。「カセット効果」は、通常未知との出会いから引き起こされるのである。

初めの出会いの後、人々は次第にその未知の対象に慣れ、理解していくようになると思われる。だが、本当のことを言えば、異言語、異文化との出会いでは、そうやってやがて理解されていく意味は、その初めに会った対象それ自体の持つ意味とは違っていることが多いのではないか。異言語、異文化を理解するのは、時間をかけたとしても簡単なことではない。だから、理解したと思っている、実はそこに違った意味を作りだしているのではないか。たとえば、古代西洋で、ローマ・カトリックはイエスのキリスト教を正當に受け継いだと思っていた。それから後、中世西洋で、ルターもまたイエスのキリスト教を受け継いだと信じた。そして、歴史が示したように、カトリックとプロテスタントとは、結果として互いに違っていたのであった。

今日、世界はグローバリゼーションの時代になったと言われる。異なる言語や文化との出会いは、ますます多くなっていくに違いない。未知・不可解な対象から理解を始めるという方法は、これからおそらく重要になっていくであろう。